

# 対話スタイルが発話の時間パターンに及ぼす影響

## ～意見固持型と聞き入れ型の比較～

○長岡千賀 小森政嗣\* 中村敏枝 DRAGUNA, Raluca Maria  
(大阪大学大学院人間科学研究科 \*大阪電気通信大学総合情報学部)

key words: 対話, 同調傾向, 交替潜時

### 目的

対話場面において人の話を聴くことは、情報を得る手段であるだけでなく、相手との関係を安定させる手段でもある。人の話を聴くには、自らの心的構えが受容的である必要があるといわれている。本研究は、受容的構えを持つ話者の対話における2者間の相互影響の過程を探求することを目的とする。ノンバーバル行動の2者間の相互影響を捉えるため、本研究では交替潜時の同調傾向を切り口とする。交替潜時とは話者交替の時間間隔であり、これまで同調傾向の研究でしばしば分析指標とされており、子どもの社会化の発達や対話相手との関係を感度よく反映することが知られている。またこれまでの研究から、受容的構えと姿勢の同調傾向との間に関係があることが示唆されている(たとえば、Schefflen, 1964; Bernieri, Gilles, Davis, Grahe, 1996; Charny, 1966; Schmais & Schmais, 1983; Siegel, 1995 Navarre, 1981, 1982)。

### 方法

**被験者** 大阪大学学部生・大学院生2人組12ペア(男12名, 女12名, 計24名)。それぞれのペアは同性同士で、初対面、かつ、予備調査の結果に基づき、ある意見や議題についての賛否が異なるように組み合わせられた。

**条件** 意見固持条件、聞き入れ条件の2つを設けた。意見固持条件では、被験者に競争的構えを持たせるために、被験者らに自分の意見を互いに主張し合わせた。聞き入れ条件では、受容的構えを持たせるために、被験者らに互いの意見を互いに聞き合い、話し合いにより2人の妥協点を見出させた。

**装置** 実験は大阪大学人間科学部感性情報心理学防音室および視聴覚実験室で行った。被験者らは別々の部屋で、マイク付ヘッドセットおよびヘッドフォンを装着した。一方の話者(話者1)の音声はマイクから入力され、オーディオワークステーション(SX-1)を経由し、他方の話者(話者2)のヘッドフォンを通じて話者2によって聴取された。逆も同様の経路である。対話音声をSX-1で収録した。

**手続き** 被験者らは各部屋に入室後、それぞれ教示を受けた。両条件の被験者とも、まず、もうひとりの被験者と、ある1つの意見または議題(女性専用車両の是非など)について15分間話し合うように教示される。つぎに、意見固持条件の被験者らは、もう1人の被験者はあなたと賛否を異にするため、相手にあなたの意見を述べるよう教示される。一方聞き入れ条件の被験者らは、もう1人の被験者とあなたは賛否が異なるため、話し合いによってその議題について2人で妥協策をみ出すよう教示される。1ペアは1つの条件に参加した。

### 結果

**交替潜時の計測方法** 収録音声をSX-1で再生し、1/3オクターブバンド実時間分析器(RION: SA-29)に入力した。時定数10msec 瞬時値オートストア間隔10msec, A特性で計測した。実験直前に騒音計(RION: NA-20)を用いてマイク位置で計測した定常音のA特性音圧レベルを基準として、計測数値とした。瞬時値が60dB(A)以上で、相槌や鼻息等ではない箇所を発話とみなし、発話開始時刻および発話終了時刻を計測した。話者2の発話開始時刻から話者1の発話終了時刻を引くことにより、話者2の話者の交替潜時を算出した。全被験者の交

替潜時の中央値は410msecであった(四分位偏差=483, n=433)。条件別には、意見固持条件490msec(四分位偏差=465, n=210)、聞き入れ330msec(四分位偏差=485, n=223)であった。

**交替潜時の同調傾向** 聞き入れ条件において、異なるペア間では交替潜時は大きく異なっても、ペア内の2者の交替潜時はそれほど異ならない傾向がある。一方、意見固持条件においてはその傾向が認められない。ペア内の2者間の差の絶対値を「2者間のずれ」とし、条件間で比較したところ、聞き入れ条件の方が意見固持条件よりも2者間のずれが小さい傾向がある(図1)。また、交替潜時の長さがペア内の2者の間でどの程度一致しているかをあらわす指標として、級内相関を算出した(表1)。聞き入れ条件では正のやや高い級内相関係数が得られ、ペア内の2者は互いに類似しているといえる。一方意見固持条件では、級内相関が負の小さな値で、ペア内の2者が互いに類似しないことが示された。

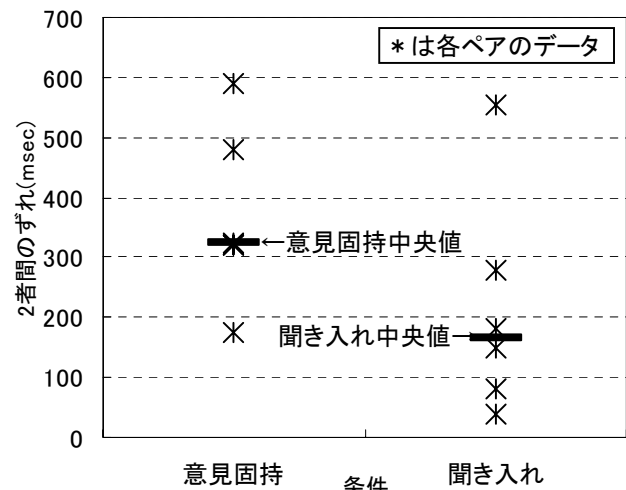


図1 各ペアの2者間のずれ

表1 一致の程度

	級内相関
意見固持条件	-.30
聞き入れ条件	.66

### 考察

本研究から、対話時の構えが交替潜時の同調傾向に影響することが示された。受容的構えで対話に臨むときには、交替潜時が同調傾向を示す、すなわち、話者は互いに相手の交替潜時に合わせようとする傾向がある。受容的構えで人の話を聴くには、相手の話を理解するだけでは不十分で、相槌や視線などの非言語的チャンネルを用いて相手の話に関心を示していることを相手に伝えることが必要である。交替潜時の同調傾向は、相手の話に関心を示していることを相手に伝える役割を担っていると考えられる。

(NAGAOKA Chika, KOMORI Masashi, NAKAMURA Toshie, DRAGUNA, Raluca Maria)